【資　料】

平成 29 年度林業研究・技術開発推進近畿・中国ブロック会議育種分科会

林　勝洋[1]

平成 29 年度林業研究・技術開発推進近畿・中国ブロック会議育種分科会は、平成 29 年 10 月 4 日に近畿中国森林管理局において、林野庁、近畿中国森林管理局、関西育種基本区内の各府県及び関係機関から 59 名が出席して開催された。

最近の林木育種の情勢について

林野庁から、林木育種に関する情報提供として、「優良種苗低コスト生産推進事業（拡充）」、「林業成長産業化総合対策」及び「花粉発生源対策推進事業」の説明があり、また、林木育種センターからは、「林木育種推進計画の策定について」、「花粉症対策品種の開発推進について」、「無花粉スギの品種開発にかかる情報提供」、「原種苗木の配布について」及び「認定特定増殖事業者への技術指導について」の説明があった。

林木育種の推進について

林木の新品種の開発

①　エリートツリー（第 2 世代精英樹）の開発について

四国北部及び四国南部育種区で、平成 28 年度までにスギエリートツリーが 76 系統、ヒノキエリートツリーは 52 系統が認定され、特定母樹では、平成 28 年度までにスギ 26 系統、ヒノキ 14 系統が指定された。また、近畿、瀬戸内海及び日本海岸西部育種区では、平成 28 年度までにヒノキエリートツリー 89 系統が認定された。なお、原種の配布は、平成 25 年度からエリートツリー、平成 26 年度から特定母樹を開始した。

第 3 世代選抜のための育種集団林の造成では、候補木を含むスギエリートツリーによる人工交配を進めており、スギエリートツリーの性能評価試験を兼ねた育種集団林を平成 25 年度に 2 ヶ所、平成 26 年度に 2 ヶ所を設定し、四国森林管理局と共同で初期成長の調査を実行中である。

②　マツノザイセンチュウ抵抗性品種の開発について

山陰及び北陸地方向け品種として、平成 28 年度までにアカマツ 52 品種、クロマツ 42 品種を開発した。また、瀬戸内海、四国及び近畿地方向け品種では、平成 28 年度までにアカマツ 46 品種、クロマツ 9 品種を開発した。今後は、山行き苗木の抵抗性を高めるため、抵抗性マツの現地での性能評価や、より抵抗性の高い第 2 世代品種の開発を進める必要がある。

③花粉症対策品種の開発について

平成 28 年度までに少花粉スギを 29 品種、低花粉スギ 5 品種、少花粉ヒノキを 22 品種開発した。

無花粉スギの開発では、成長や材質等に優れた無花粉スギ品種の育成をめざし、林木育種センターで開発した無花粉スギ「爽春」及び「三重不稔（関西）1 号」と、成長や材質等の優れたスギ精英樹等との人工交配を進めており、作出した無花粉スギは定植し、成長等の形質を調査中である。

育種種苗の生産と普及

育種種苗の生産と普及の状況について、実績の説明を行った。関西育種基本区における平成 27 年度の育種種苗の使用率は、スギは 82%、ヒノキは 100% となっている。

原種の配布

関西育種場での平成 28 年度の配布実績及び、平成 29 年度の配布予定の説明を行った。配布本数は、平成 28 年度が 4,371 本、平成 29 年度予定が 6,781 本である。

[1] はやしかつひろ　森林研究・整備機構 森林総合研究所林木育種センター関西育種場

林木育種事業の取り組みについて

平成 29 年度は、各府県ともにほぼ前年並みの事業・研究の取り組みが計画されており、特定母樹等の成長の早い品種のミニチュア採種園の造成及び造成準備が複数の県で進められる。また、花粉症対策品種の採種園の造成及び造成準備が複数の県で進められる。

協議事項及び要望事項について

協議事項では、「育種事業・研究に関する、最近の話題や解決が求められている事項等について」、今後の課題と対策等の意見交換を行った。

また、提案・要望事項では、①苗木の安定供給体制を整備するためには計画的な採種園の整備が不可欠であることから、各府県からの要望を満たす採種園用苗木の配布をお願いしたいこと、②特定母樹が早期に花粉症対策苗とみなされることを希望する要望が出され、意見交換等を行った。

その他

その他として、平成 29 年 10 月 4 日から平成 34 年 3 月 31 日までの約 5 年間の関西育種基本区における林木育種の推進に関する基本的な事項について取りまとめた「関西育種基本区林木育種推進計画」案を諮り、承認された。